

No.(1)		
至誠中学校区	校番 19	福山市立熊野小学校
最終更新日	2023年(令和5年)2月24日	

I 福山市

ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
 ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	主体的に学び合う力
<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍においても、アイデアを出し合い、「自分で考えて、決めて、行動する」ということを大切にされた教育活動を行っている。 至誠中学校区3校の教育活動が、校区全体に共有化され、地域と共に子どもを育てる環境を整備する。 	<ul style="list-style-type: none"> 積極的に挨拶をすることができ規範意識が高いが、自己肯定感が低い児童・生徒もいる。 基礎学力の定着や主体的な学習習慣の確立と活用力及び基礎体力に課題がある。 	中学校区として統一した取組等	主体的に課題を発見し、協働して解決することができる子ども 授業づくり めざす子ども像の実現に向けて、各校の授業公開を通して協議し、「子ども主体の学びづくり」の充実を目指す。

III 自校

ミッション 確かな学力・豊かな心・健やかな体をもつ児童を育成し、保護者・地域に信頼される学校	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	課題解決力	コミュニケーション力	粘り強さ
学校教育目標 くじけず まなび のびやかに 元気いっぱい熊野っ子の育成	1・2年	身近な生活体験から、自分の課題に気付いている。	友だちの話をうなずきながら聞き、自分の考えを最後まで伝えている。	自分でやると決めたことやみんなで作ると決めたことを最後までやり通している。
現 状 <児童生徒> ・児童アンケート「身の回りから課題を見つけ、自分たちで解決しようとしている」の肯定的評価は、82.5%であり、児童が自分で考える・決める・選ぶことの習慣化を図っている。 <授業> ・「子ども主体の学びづくり」に向け、総合的な学習の時間や生活科と算数の関連を研究してきた。児童アンケート「算数で学習したことが、総合や生活科の授業で役に立つと思う」肯定的評価は、92.5%であり、引き続き、探究する学びの質を高めていく。 ・教師アンケート「子ども主体の学びに向け、他の教員と対話したり、新しいことに挑戦しようとしたりしている。」の肯定的評価100%であり、研修を通して、共通の課題を見つけ、その取組を交流することで、同じ目標に向かって考え、実践している。 (数値は、2022年2月末)	めざす子ども像	3・4年 課題解決の場面において、自己の課題に適した改善策を考えている。	自分の考えと友だちの考えを類似、相違の立場で比べて聞いている。	あきらめずに、挑戦している。
	5・6年 自己課題解決への計画、実践、評価、改善を繰り返している。	友だちの考えに質問やアドバイスをしたり、自分の考えを相手が納得できるように伝えたりして、互いに認め合っている。	自分で目標を立て、主体的に目標達成にむけて行動している。	
	テーマ 研究 内容等	生きた知識を生み出す「探究する学び」の創造 ・総合的な学習の時間を柱とし、算数科「データの活用」、国語科「話す・聞く」「資料を用いた説明文」を中心に教科横断カリキュラムを作成する。年度末には、「何の力が結びついているのか」を整理する。 ・単元で付けた力を生かし、児童が自分の力で課題解決したり表現したりできるよう、教師が単元で付けるスキルを明確にし、児童と共有する。 ・児童同士の対話を通して、疑問に思うことなどを表現し、問いを導きだしている。 ・学習したことを生かして分析したり、まとめたりし、探究する学びの質を高めている。		
	めざす授業の姿			

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立熊野小学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る取組状況	力への達成評価	改善方策	□指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	力への達成評価	達成評価	総合評価	改善方策	
3	主体的に学ぶ児童の育成	★	継続	総合的な学習の時間を柱とし、算数科「データの活用」、国語科「話す・聞く」「資料を用いた説明文」を中心に教科横断カリキュラムを作成する。	単元を通して児童が付けるスキルを明確にし、授業のなかで児童と共有する。	<ul style="list-style-type: none"> 児童アンケート「授業を通してどんな力がつかのか理解している」80%以上。 教師は、「教科の何の力が結びついているか」を学期末ごとに整理している。 	肯定的評価93.2%であった。各学年で考えたスキルマークをもとに、単元を通して身に付けるスキルを児童と共有している。それを、カリキュラムマップとスキル関連表にまとめ整理している。	4	3	小単元でも、スキルマークを提示し、児童が身に付けるスキルをより意識できるようにする。また、次年度へつながるように、スキル関連表の作成を継続する。	肯定的評価97.5%であった。小単元でも何の力がつかスキルを明確にしたことで、児童の意識が高まった。何の力が結びついているか明確にしたスキル関連表の作成ができた。	4	4	4	スキルマークを継続するとともに、単元の前にレディネステストを行い、児童の実態を把握した授業づくりをする。今年度のスキル関連表をもとに、授業を行い、加筆修正し、よりよい実践につなげる。
			継続	子ども主体の学びについて理論と実践をつなぐ研修を継続する。	「子ども主体の学びづくり」について取り組みを協議したり、日々の授業で実践したりし、研修で交流する時間を位置付ける。	<ul style="list-style-type: none"> 教職員アンケート「子ども主体の学びについて他の教員と対話したり、実践したりしている」80%以上。 教師は、日々の実践で取り組みを継続的に意識できるよう工夫している。 	肯定的評価88.8%であった。授業研究後の協議を受け、短期目標を設定し、全員で取り組んだ。子ども主体の学びづくりに向けた悩みなど交流している。	4	3	短期目標への取り組みを行い、学びづくり研修で定期的に振り返り共有する。日々の授業実践を通して、理論と実践をつないでいく。	肯定的評価88.8%であった。授業研究後、短期目標を教員全体で協議・決定している。それを定期的に振り返り交流する場を設定し、改善を重ねている。	4	3	3	定期的に振り返り交流することで対話も生まれ、自分の実践を見直すきっかけとなっている。次年度は、日々の授業の板書などを見せ合い対話を重ねていく。
3	自己実現に向けて未来を切り拓く子どもの育成	★	継続	発達段階に応じたライフスキルの獲得を図る。	講師を招聘し理論研修をしたり、計画に沿って研究授業をしたりする。	児童アンケート「ライフスキルを学ぶことは、自分の役に立つと思う」肯定的評価80%以上。	肯定的評価95.8%であった。ライフスキルで学んだ意思決定や目標設定を生かした授業づくりについて学んだ。	3	4	引き続き、学活で学んだライフスキルを各教科の中でも使えるように、授業を考え実践していく。	肯定的評価97.5%であった。児童が選んで意思決定することや興味をもったことから課題設定するなど、日々の授業の中で実践できた。	3	4	3	引き続き、学活や授業の中でライフスキルを学び日常生活に活かす機会を設けていく。
			新規	体力テストの結果から課題となる項目について取り組む。	子どもが主体となった体力向上計画を実施する。	準備運動等で、児童が考えた運動を取り入れている。	4年児童が中心となり課題となった項目を強化する運動を考えている。	3	3	楽しくできる準備運動や運動コーナーを作り、全校で取り組む。	児童が運動コーナーを作ったり、体力アップ週間を設定したりし、主体的に取り組んだ。	3	3	3	来年度は1学期の体力テストの分析結果から2学期に実施するようにする。
3	子どもの学びを支える環境づくり		継続	児童の姿を丁寧に見取り、校内で情報共有をする。	関係者を中心に、組織的な対応を行う。	保護者アンケート「わが子は、楽しく学校に通っている」肯定的評価90%以上	肯定的評価95.1%であった。昨年度の98%を下回っているが、不登校0である。	3	3	情報を共有し組織的に動くと共に、きめ細やかに家庭と連携し、児童に関わりきる。	肯定的評価95.2%であった。ほとんどの児童が楽しく学校に通っている。	3	3	3	家庭、地域との連携を密にし、児童がのびのびと学ぶことのできる学校体制を整えていく。
			新規	授業づくりを行う時間を確保する。	会議等の内容を精選し、計画的に実施する。	教職員アンケート「授業づくりを行う時間が確保されている」肯定的評価80%以上	肯定的評価100%であった。会議等の精選により授業づくりの時間が確保されている。	3	4	仕事の優先順位をつけ、自ら時間を確保し、コーディネートしていく。	肯定的評価100%であった。自分に合った働き方や時間の使い方ができるようになってきている。	4	4	4	さらに働き方改革を加速させ、児童に確かな学びを提供していくための教材研究等の時間を確保する。